

# おふでさき 世界の歩く

第 9 回

山澤昭造

【やまざわ しょうぞう】  
本部准員  
天理教校本科研究課程主任

## 二号 1—24

二号の表紙には、「明治二年三月」と記されています。一号から二カ月後になります。一号に続いて執筆されたのでしょうか。ただし、一号は書き流されている箇所が多くありましたが、二号は、書き流しはなく、体裁は整っています（※1）。

一号でふれましたが、「おふでさき」は、次の二点を主題として記されています。

①「うち」において「つとめ」が勤められるようにすること。

②「せかい」に向かって布教伝道すること。

一号は主に、「つとめ」が勤められるようにするにあたって、「うち」の者の心を澄ますということが話題にされました。それに対して、二号では、はじめに「つとめ」について説明した後、「せかい」への布教伝道について述べられます。

二号 1—10  
これからハをくはんみちをつけかける

これからハをくはんみちをつけかける

せかいの心みないさめるで

(二・一)

上たるハ心いさんでくるほどに

なんどきにくるこくけんがきた

(二 2)

ちやつんであとかりとりてしもたなら

あといでるのハよふきづとめや

(二 3)

このつとめとこからくるとをもうかな

上たるところいさみくるぞや

(二 4)

たんくと神のしゆごふとゆうものハ

めつらし事をみなしかけるぞ

(二 5)

にちくに神の心のせきこみを

みないちれつハなんとをもてる

(二 6)

なに、てもやまいいたみハさらになし

神のせきこみてびきなるぞや

(二 7)

せきこみもなにゆへなるとゆうならば

つとめのにんぢうほしい事から

(二 8)

このつとめなんの事やとをもてゐる

よろづたすけのもよふばかりを

(二 9)

このたすけいまばかりとハをもうなよ

これまつたいのこふきなるぞや

(二 10)

〈往還道を付けかける〉

1の「をくハんみち」は「往還道」で、人々が自

由に往来のできる広い道を意味します。地方によつ

ては、「往還」という言葉で、街道や国道などの主

要道路や大通りを指す場合もあります(※2)。

そうしたところから転じて、親神様の思召おぼめしを自由

に人々に伝えることのできる状態、さらには、それ

によつて大勢の人々が「おやしき」にやつて来る様

子を指す言葉ではないかと理解しています。

「おふでさき」に、

をもしろやをふくの人があつまりて

天のあたゑとゆうてくるぞや

(四 12)

というお歌があります。これは、「かんろだい」が

据えられ、「かぐらづとめ」が勤められることによ

つて、不思議珍しい「たすけ」が行われるようにな

ると、大勢の人が、その利益りやくを求めて「おやしき」

を訪れるようになるということを詠よんだお歌です。

「往還道」とは、そのような道の状態を指し示して

おり、二号1は、これからそのような道を付けかけ

そのうえで、世界の人々の心を勇むようにしていく

と宣言されているのです。

2では、そのような「つとめ」による道を付けか



に立つ人々の心も勇んでくると言われています。これはどういうことを言われているかという点、

①「おやしき」で「つとめ」が勤められ、不思議、珍しい親神の守護が現されるようになる。

②すると、それが「証拠」となり(※3)、上に立つ者も、親神(教祖)のお話が真実であるということが分かるようになり、心勇んできて、この「おやしき」を訪れるようになる。

このような状況を指しているのだと理解します。しかも、それは未来のことではない。すぐにもそれが実現するようになると言われているのです。

1、2のお歌は「つとめ」という言葉こそ出てきませんが、「つとめ」が勤められるようになる将来の姿を詠まれているのではないかと思案します。

そして3では、唐突に、茶摘みの話が出てきます。これは「つとめ」の準備に取りかかる時期を教えられているのです。「お茶の葉を摘んで、後を刈り取ってしまったら」、その後で、いよいよ「陽気づとめ」の準備に取りかかると言われています。

このお歌は、言葉遊びになっています。お茶の葉を摘んで、後を刈り取ってしまったら、後に幼木、

新しい芽が出てきます。その新芽と「陽気づとめ」の「め」が語呂合わせになっているのです。茶葉の収穫の喜びの後にくる「陽気づとめ」の飲よむびが歌われていると言えるでしょう。このお歌が詠まれた当時、「おやしき」では、十二下りの「てをどり」の稽古が熱心に行われていました。そのうえで、これからさらに「かぐらづとめ」の準備にも取りかかっていくと言われているのです。

『おふでさき註釈』によりますと、庄屋敷しよやしき村付近で茶摘みというと、大体陰暦五月ごろであるそうです。

この年、明治二(一八六九)年に限らず、『教祖伝』に陰暦五月の史実をたずねてみると、「おつとめ」に関する出来事がいくつかあることに気がつきます。たとえば、明治七年陰暦五月五日に「かぐら面」をお迎えに行かれ、明治八年陰暦五月二十六日には、「かんろだい」の「ぢば定め」が行われています。陰暦五月は、「おつとめ」にゆかりの深い月なのかもしれません。

なお、「茶を摘む」ことを、人々の胸の掃除、すなわち「やしきの掃除」ができたことの比喩として捉える解釈もあります(※4)。



4のお歌の解釈については、1、2で述べた通りです。

〈つとめの人衆欲しいことから〉

3で「陽気づとめ」の準備に取りかかるとありましたが、そのことに関連して、5から8にかけて、身上を通して、「つとめ人衆」となる人々を「おやしき」へ引き寄せると言われています。

5にある神の守護による「珍しいこと」とは、「病・痛み」(身上・事情)を指します。親神様は、「つとめ人衆」として仕込みたいと考えておられる者に対して、これから身上・事情を現していこうと考えている。しかし、それは一般的な意味での病や痛みではない。すべて親神の急き込みであり、手引きなのだということです。

たとえば、少し時代は下りますが、明治十年から三年かけて、教祖は自ら女鳴物を教えられます。最初に教えられたときの様子は、『逸話篇』52から55に紹介されていますが、いずれも、このお歌の通り当人や家族の者の身上を契機として「おやしき」へ呼び寄せられ、鳴物を習わせておられます。教祖は、

身上や事情を通して、人々を「おやしき」へ引き寄せ、「おつとめ」や教理を仕込み、「つとめ人衆」として勤めることができるよう少しずつ導いていかれたのです。

一般的に病というと、人間にとって望ましくないことです。しかし、病には親神様の「てびき」という側面も大きいのです。病を通して「つとめ人衆」をそろえていく、それを「珍しいこと」と表現されているのだと思案します。

〈「つとめ」による「たすけ」は末代の「こふき」〉

9と10は、これから教えていこうとされている「かぐらづとめ」の意義が述べられています。すなわち、9では、この「つとめ」は、「よろづたすけ」をもたらすための段取りであると言われています。

「よろづたすけ」とは、あらゆる「たすけ」ということです。『天理教教典』の第二章「たすけ一条の道」にも記されている通り、「つとめ」による「よろづたすけ」は、身上・事情を治めることはもちろん、天候の守護、農作物の恵み、戦争の治まり、そして「病まず、死なず、弱らず」の守護までを含ん

だものです（※5）。

この「かぐらづとめ」によって、このような「よろづたすけ」をもたらしたいというのが、親神の思いなのだと言われているのです。

さらに、10では、この「つとめ」による「たすけ」は今ばかりではなく、末代にわたつての「こふき」となるものなのだ、と述べられています。

「こふき」は、「こうき」と読みます。昔の「こふき話」の諸本の題名は「古記」となっているものが多いようですが、二代真柱様は強いて字を当てると「日記」となるのではないかとおっしゃいました。

「鴻基」〔大きな事業の基礎。偉業のもとの意〕という字が用いられることも多いようです（※6）。そのほか、綱紀、功記、後記、光輝などいろいろ考えられますが、いずれにしましても、「こふき」は、

「たすけ一条の根本となるもの」「お道の根本教理」を指し、お道を信仰する者が必ず心得ていなければならぬ、そして末代まで変わらず伝えていかなければならないものを意味します。

「こふき」というと、中山正善『こふきの研究』〔道友社、昭和32年〕に収載されている「こふき話」の書

き物を思い浮かべる方が多いようです。しかし、厳密にいうと、「こふき話」は「こふき」の中の一部分であって、「こふき」には「おつとめ」も含められます。このあたりを混同しないようにさせていたいただきたいと思えます。

芹澤茂『教義研究 おふでさき講座』〔天理教青年会本部、昭和51年〕によると、「こふき」の内容は、具体的には次のような「たすけ一条」〔特別な救けの手段〕と「はなし一条」〔特別な神様のお話〕から成ると説明されています。

A たすけ一条〓つとめ・さづけ

B はなし一条〓「こふき話」「ひながた」

## 二号11—24 はやくとをもててよふとをもへとも

一寸はなしのぼせかんできゆうている

やまいでハない神のせきこみ (二 11)

たんくとしんぢつ神の一ちよふ

といきかせどまだハかりない (二 12)

はやくとをもててよふとをもへとも

みちがのふてハでるにでられん (二 13)

このみちをはやくつけよとをもへとも

ほかなるところでつけるところなし

(二 14)

このみちをしんぢつをもう事ならば

むねのうちよりよろづしやんせ

(二 15)

このはなしなんの事やとをもている

神のうちわけばしよせきこむ

(二 16)

このみちが一寸みえかけた事ならば

せかいの心みないさみてる

(二 17)

なに、ても神のゆう事しかときけ

やしきのそふぢでけた事なら

(二 18)

もふみへるよこめふるまはないほどに

ゆめみたよふにはほこりちるぞや

(二 19)

このほこりすきやかはろた事ならば

あとハよろづのたすけ一ちよ

(二 20)

このさきハたん／＼つとめせきこんで

よろづたすけのもよふばかりを

(二 21)

せかいぢうとこがあしきやいたみしよ

神のみちをせてびきしらすに

(二 22)

このよふにやまいとゆうてないほどに

みのうちさハリみなしやんせよ

(二 23)

にち／＼に神のせきこみこのたすけ

— みな一れつハなんとをもてる

(二 24)

〈病ではない神の急き込み〉

二号1—10は「つとめ」について言及されましたが、続く、二号11—24では、これから、この「おやしき」から道を本格的に付けかけ、世界の人々の心を勇ませていくと言われています。

そのためにも、教祖のおそばにいる人々は、神の思いを心から思案してもらいたいと望まれています。それが11、12のお歌です。これから世界たすけに取りかかっていくに際して、そばの熱心な信者に対し、しっかりと信心して、この道についてくるようにと諭されたお歌ではないかと思案します。将来、「つとめ人衆」としてつとめる人を仕込んでいるお歌と読むこともできるでしょう。

11、12の背景事情については、『おふでさき註釈』に記されています。この当時、辻忠作つじちゅうさくの妹いもうとからの心の病が再発して、嫁ぎ先から実家に帰っていたといえます。周囲の人々はいろいろと噂うわさをしているが、これは世間一般にいうような病ではない。神の急き込みを身上に現したのだと筆に記されたのです。

忠作は、文久三（一八六三）年に妹の身上をたすけられて、信仰を始めましたが、このお歌が詠まれたころ、少しお道から遠ざかっていったそうです。それに対して、「親神はこれまでからも、だんだんと真実の神の一条の思いを説き聞かしているが、まだ分かっているようにだ。よく思案してもらいたい」と言われ、妹の病気を「てびき」として、親神様の思惑をよく思案するように望まれたのです。

#### 〈神の打ち分け場所を急ぎ込む〉

13に「早々と表へ出ようと思う」とあります。つまり、これまでは、主に「おやしき」を訪ねて来る人に教えを説いていたが、これからは、早々と表へ出て、より積極的に布教伝道していこう、ということです。

しかし、そのための道がなくては、いくら親神様が出ようと思っても出られない。そして、その道は、「ほかなる所」では付けることができないのです（14）。

この「ほかなる所では付けることができない」ということに関しては、二通りの解釈ができます。ま

ず、一つ目は、この元の屋敷において、ほかの所からでは付けることができないとする解釈です。元の屋敷から付けかけていくというのです。

そして、もう一つは、「人間の心の誠」とする解釈です。親神様は、人間の心の誠に乗って働かれます。親神がこれから積極的に働いて、道を付けていこうといくら思っても、おまえたちの心に誠がなければ働くことができないと暗に諭されている。前後のお歌の流れから考えて、そのように読むことも可能なのではないのでしょうか。ここでは、両方の意味に取っておきたいと思います。

そして15では、神が付けかけようとしているこの道のことを真実に思うのなら、胸の内から万事思案してもらいたい。つまり、「おやしき」にいるそばの人々に対して、誠の心を治め、しっかりとした信心の心を定めてもらいたい、と望まれています。布教伝道にあたっては、自らの心を治めることを第一にしてもらいたいと言われているのです。

うえだよしな  
上田嘉成『おふでさき講義』（初版、天理教婦人会、昭和48年）は、二号15に関して、次のように記しています。

……自分の心の奥底をよく考えて、自分の心の底の底にある本当の真実が、親神様の御心に叶かなつたならば、道が本当に表に出て往還道になるという御守護をいただけるのである。

(略) 早く表へ出ようと思つたら、急いで外へ走つて行くのがよい、と人間思案では思いかねないのですが、自分の本当の心が親神様の本真実に叶わなかったら、どんなにあわても同じであつて、本当に澄み切つた誠真実の心になつたならば、自然と広い世界へ往還道がつくのだ、というのが、いつも親神様の仰せ下されて居るところです。

(上田嘉成『おふでさき講義』三版、道友社、昭和50年、30ページ)

以上のようなことを踏まえたうえで、16では、いましている事柄は、「神のうちわけばしよ」を急ぎ込んでいる話なのだ、と述べられます。

「うちわけばしよ」は「打ち分け場所」「打ち」は下の動詞の意味を強める接頭語)です。『おふでさき註釈』には、次のように説明されています。

註 うちわけばしよとは、打ち分け場所、将

来は内、中、外に各々三十一カ所宛、都合九十三カ所出来ると仰せられた。如何いかに難病の者でも、その打ち分け場所を回っているうちに、病気を救けて頂くのであるが、そのうち一カ所は非常に辺りな所にある。しかし、これを略するようでは救からない。又また、たとい途中で救かつても、車やつえを捨てないで、結講に救けて頂いた事を人々に知らせて、最後にそれをおぢばおぢばに納めるので、もし途中でそれを捨てたならば、一旦救けて頂いても、又元通りになる、と仰せられた。

伝承によつては、打ち分け場所からは一つずつ「許しもの」が出されると記しているものもありますが(※7)、詳細はよく分かりません。前後のお歌で「おつとめ」が話題とされていることから思案して、打ち分け場所では、「おつとめ」が勤められるのでしようか。「おぢば」の理を分けてくださる所であり、「おぢば」以外の場所にある、この教えを説き、親神様のたすけを取り次ぐことのできる場所が、「打ち分け場所」だと考えられます。

親神様のお心になうところまで十分成人した者

に対して、いずれは「打ち分け場所」を任せようと親神は考えている、どうかそこまで信心の道を進めてくれと望まれているのが16のお歌ではないでしょうか。

そして、そのような「おやしき」と「打ち分け場所」の姿が少しでも見えかけてきたら、世界の人の心もみな勇み出てくると言われています。

### 〈やしきの掃除でけたことなら〉

ここまで、親神様が抱いておられる将来に向けての見通しが述べられてきました。①「つとめ」によって「よろづたすけ」をもたらしやりたい、そして、②世界の人々の心を勇むようにしていきたいと言われているのです。

18―20では、そのための第一歩として、現実立ち戻って、まず、いまなすべきこととして、「やしきの掃除」をしてもらいたい。「おやしき」にいる者の心を掃除してもらいたいと言われています。

「やしきの掃除」の話題は、第一号でも出てきました。具体的には、おちゑという女性を「おやしき」から出すことによって、「あくじ」の心を出すとい

うことでした。ここでは、そうした事柄だけでなく、「おやしき」の人をはじめ、そばの者の心を澄ましたいと言われているのではないかと思案します。

「やしきの掃除」ができると、横目（脇目）をする間もないほど、あつという間に、これまでのことはまるで夢を見ていたかのように、鮮やかに、皆の心から「ほこり」がすっきりとなくなってしまう。そうすれば、「よろづのたすけ一条」「よろづたすけの模様（段取り）」（21）、つまり「かぐらづとめ」の段取りに取りかかると言われています。

3では、「かぐらづとめ」の準備に取りかかる時期を示されましたが、ここでは、「やしきの掃除」ができたなら取りかかると言われています。

### 〈身の内障りみな思案せよ〉

5―8では、身上・事情を通して、「つとめ人衆」となる人々を「おやしき」へ引き寄せると言われていますが、22のお歌では、あらためて身上・事情の意味するところについて、それらは「神の道教え、手引き」なのだと教えられています。人間はいざ身上になると、「どこが悪い」「どこが痛いところだ」

などと言っているが、人間の考えているような意味においての、病というものはない。身の内の障りについては、病に込められた親神の思いを、そして自らの心づかいや通り方をみなよく思案することが大切だ(23)と述べられています。

24では、親神は、「かぐらづとめ」が勤められるようにして、「よろづたすけ」を人間に与えたいと日々急ぎ込んでいる。それをおまえたちはどのように考えているのか。身上や事情を通して、親神の思召を思案し、「つとめ人衆」として少しでも成人してもらいたいとあらためて望まれ、この段落を結びれています。

おふでさき  
の世界  
を歩く



※1 中山正善『続ひとことはなし』(道友社、昭和26年、99ページ)参照。

※2 『日本国語大辞典 第二版』第2巻(小学館、平成13年、840ページ)には、次のようにある。おうかん【往還】

【名】(「おうがん」とも)①行き帰り。ゆきぎ。往来。往復。おうげん。②行き帰りの道。通り道。街道。おうげん。【方言】①街道。国道などの主要道路。大通り。②道路。

通り。往来。③町。市街。④公然と。おおつびらに。⑤駅から駅へ通じる道路。

※3 ここで述べられているような、「つとめ」が「証拠」になるという事柄は、第三号で再び述べられ、この後たびたび話題にされる。

※4 以下を参照。

●『おふでさき釈義』昭和3年版

●「朝席」『みちのとも』昭和11年9月号、4ページ

※5 中山正善『こぶきの研究』道友社、昭和32年、132—133ページ

※6 以下を参照。

●松本茂『「から」と「ほん」——本居宣長のからごころ批判との関連から』天理やまと文化会議編『G-T-E-N』41号、平成元年、53ページ。

●芹澤茂『風の心 私のおふでさき入門』天理やまと文化会議、1993年、107ページ。

●上田嘉世『おやさまの教え用語解説』天理教青年会本部立教181年、130—131ページ。

※7 『天理教高安大教会史』昭和2年(平成元年復刻)、高安大教会、51—52ページ参照。